

『兼好法師集』における「花」と「月」について

須田 瑞穂

はじめに

兼好法師は『徒然草』の作者であり、随筆家として著名である。しかし、兼好が生きた時代には、「和歌四天王」の一人とされ、二条派歌人として活躍していた。兼好の和歌の現存総数は、斎藤彰氏^①によると、兼好自撰家集が二八五首と連歌二句あるうち、他人詠一五首と他人詠の連歌一句、および重複歌一首を除く、一六九首と一句、勅撰集入集歌一首（他に家集と七首重複）、高野山金剛三昧院奉納短冊歌五首、北野社百首和歌一首、玄恵法印追善詩歌二首、二条為世十三回忌品経和歌二首、民部卿家褒貶歌三九首（他に家集と四首重複）、続草庵集一首、長泉寺什物五八首の自作歌を合計した総数計三八八首と連歌一句であるとされている。また、南部輝二氏^②は斎藤氏の数から長泉寺什物を存疑歌として除き『兼好法師全歌集総索引』^③に従い計三三〇首と一句であるとされている。

勅撰集に入集している歌は、斎藤氏は一首（他に家集と七首重複）とされている。また、私撰集・私家集・その他に入集している歌は、斎藤氏は五〇首とされている。なお、長泉寺什物として五八首が知られているが、私は存疑歌扱いとされている南部氏の論にしたがいたい。本稿では、右の家集以外の和歌は除き、『兼好法師集』の二八五首（重複詠一首を除く二八四首と連歌二句〈これを一首と数えている〉を含む）を対象に、そこにみられる「花」と「月」を手がかりとして、兼好の詠歌の特徴を考えるものである。

これらの歌からは、二条派歌人や宮廷の歌人たちとの交流を知ることができ、兼好の交遊圏がわかるとともに、詞書からも二条派歌人としての兼好の活躍をみるることができる。

『兼好法師集』には兼好の考えが強く反映されているものと思われるが、特徴として、「花」と「月」が詠まれた歌の割合が多いといえる。『兼好法師集』において使用された和

歌素材でその数の多いものは、「花」三八首、「心」三四首、「月」二三一首である。贈答歌における他人詠も含み「花」を素材として詠まれたものは、『兼好法師集』の総歌数二八五首に対し、約一三%の割合を占めている。同様に「月」は家集の総歌数に対し、約一%の割合を占めている。そこで、本稿では「花」と「月」をてがかりとして、兼好の「花」と「月」に対する意識を考察していきたい。

一

普通、「花」と「月」は季節感を表すものとして詠まれることが多い。特に「花」は春の桜が、「月」は秋の月が多く詠まれる。また、しかし「花」や「月」は、自然の美として表現されるといっただけではなく、心の内に生じる情趣や哀愁、人や物に対して馳せる思いが託されるものとしても詠まれることがある。例えば、「月」や「花」を多く詠んだといわれる歌人として西行が有名であるが、西行は、「ねがはくは花のしたにて春しなんそのきさらぎのもちづきのころ」(『山家集』七七)⁽⁴⁾と、「花」と共に生きて、また生涯を総括するよな歌を詠んでいる。兼好の歌にも、自然美を表現する歌と「花」や「月」に託して自身の思いを表現する歌が多いが、「ちぎりおく花とならびのをかのへにあはれいくよの春をすぐさむ」(『兼好法師集』二〇)⁽⁵⁾と、西行のように、花のそばで生涯を終えるときの願望を詠んだ歌がある。兼好にとって

「花」は、兼好の生活とともに過ごすものであり、生活の中にある欠かせないものであったとうかがえる。

兼好は、自然物に対して、自然の景色が次第に変化し、心の内に生じる情趣や哀愁もそれにつれて変化してゆくものとしても、捉えていたようだが、大島貴子氏は「兼好の自然物に対する関心は、四季の動きを主軸としているように思われ、時間の流れは四季の推移として最も身近に感じられ、その四季の推移はまた、その時々に移り変わる自然の風物によって最も端的に感じられる。」⁽⁶⁾と述べ、『徒然草』における兼好の自然物に対する関心が、四季の動きを主軸としてしているとされている。この論は、兼好の季節の変化を感じとる見方として述べられているが、『徒然草』に限らず『兼好法師集』に通じるものではないかと思われる。

西行についてみると、例えば、

寄月述懐

世の中のうきをもしらですむ月のかげはわが身のこころこそすれ
(山家集・四〇一)

花の歌あまたよみけるに(六二〜八六までの題)

はなにそむこころのいかでのこりけんすてはててきと思ふ我が身に
(山家集・七六)

にみるように、自分の理想とする境地は、澄んだ月と同じような心地であるということを詠んだり、世を捨てたが、花に深く心を寄せる思いが残ってしまったと、桜の花にひかれる

心の深さを詠んだりしている。他にも数多く「花」を詠んだ歌がある。また、「花」と同様に「月」を詠んで、心の内に生じる情趣や哀愁を詠んでいる歌も多い。

また、兼好と同時代の歌人で、兼好に『古今集』を講説した二条為定や、為世門の四天王の浄弁、慶運、頓阿にも、百首歌たてまつりし時、秋歌 民部卿為定
秋をへてなみだおちそふ袖の月いつをはれまとみる夜半
もなし
(風雅集・六一〇)

題しらず 浄弁

杉たてる門田の面の秋風に月影さむき三輪の山本

(新拾遺集・四三三)

雲間月 慶運

みればなど心すむらん村雲のひまゆく月はのどけからぬ
を
(慶運集・一一五)

九月十三夜関白殿にて、月前嶋 頓阿

月やどる沢田の面にふす嶋の氷より立つ明がたのそら

(統草庵集・二三〇)

などの作がある。ここでは「月」の歌を挙げたが、自然の美として表現するだけでなく、「月」に託して、心の内に生じる情趣や哀愁を詠んでいるとみられる。歌人にとって「花」と「月」は詠まれて当然の和歌素材でありながら、自然美を詠むためだけのものとしてではなく、心の思いを託すものとして詠まれるものであったと言えるだろう。

二

兼好の「花」と「月」の歌も、季節感を表したり、自然の美として表現するものだけではなく、心の内に生じる情趣や哀愁、人や物に対して馳せる思いを詠むものでもあるが、時間や景色の変化を表す「時の流れ」を詠んだものが多い。そこで、家集にみられる「時の流れ」を詠んだ歌をみていきたい。

ところで、『兼好法師集』における「花」と「月」の歌を大きく分類すると、叙景歌は「花」一一首(三三%)、「月」一二首(四〇%)、抒情歌は「花」二五首(六七%)、「月」九首(五九%)となり、叙景歌と抒情歌の二つに分けることができる。

まず、叙景歌は景物を自然美としてのみ詠んでいる歌である。例えば、

いし山にまうづとて、あけぼのにあふさかをこえし
に

雲のいろにわかれもゆくかあふさかのせきぢの花のあけ
ぼののそら(二)

こよろぎのいそといふところにて、月を見て

こよろぎのいそよりとほくひくしほにうかべる月はおき
にいでにけり(七四)

などの歌がある。二番歌は、はじめ分からなかった雲と花と

の区別が、次第にはっきりしてゆく推移を表し、七四番歌は、引いてゆく潮や月が沖に出るといふ、時間の経過により変化する景色を表している。それぞれ、その景色が次第に変化をしていく様子が表されており、その変化とは「時の流れ」であり、兼好が時間の経過によって、景色の推移を捉え、それを歌に詠み込んでいると思われる。

つぎに『兼好法師集』において、叙景歌よりも高い割合で詠まれている、抒情歌について考察する。抒情歌をくわしくみてみると、さらに四つに分けることができる。

〈一〉景物をみて生じた思いを詠んでいる歌。例えば、

ひとり花のもとにたづねいりて

見ぬ人にさきぬとつげむ程だにもたちさがたき花のかげかな（一六一）

七月七日、月のかたぶくを

あまの川みをゆく月はながるともあふせにかけよくものしがらみ（七）

などの歌がある。一六一番歌は、桜の花をまだ見ていない人に、咲いたことを知らせようとするわずかな間も、桜が美しいので立ち去りがたいと詠んでいる。七番歌は、天の川の水脈を行く月は流れて西に沈もうとしても、彦星と織姫の逢瀬のために、天の川瀬に雲のしがらみをかけて流れをせきとめてほしいと、西に傾いた月を見て、雲が時の流れを止め、二つの星の逢瀬が長くなるように願って詠んでいる。それぞれ、

その景色をみて心境を詠んでいるが、その景色は時間により変化をしており、それをみて心に生じる思いを「花」や「月」に託して詠んでいる。

〈二〉主に昔を思い出して詠んでいる歌。例えば、

をぐらの宮のすみ給ひけるところといふ堂にとまりて、ありあけの月おもしろきあけぼのに、いろいろの花をりて仏にたてまつるとて、月のこり露むすばんあした、まがきの花をりて仏界に供せむとかかれたるをおもひいでて

むかしおもふまがきの花を露ながらたをりていまもたむけつるかな（一九）

月を見て

おもひいづるなみだに月のくもらずはむかしながらのかげも見てまし（一九八）

などの歌がある。ともに昔を思い出して、「花」と「月」を詠んでいるように見えながら、「自分」の昔の状況と今の状況が表されている。兼好が捉えた過去と現在のその時の状況を「時の流れ」により変化した、それぞれの状況を歌に詠み込んでいると思われる。

〈三〉主に世を厭うこと、嘆くことを詠んでいる歌。例えば、

花を見て

はなのいろは心のままになれにけりことしげきよをいと

ふしるしに (五五)

月にむかひておもひつづけし

風そよぐ竹のは山の秋の月のどかにすまぬ世こそしらる
れ (二四五)

などの歌がある。五五番歌は、「ことしげき」この世を嘆くその景色は今までとは変わららず、変化したのは自分の身の上や心境であることが表され、二四五番歌は、「月」が雲に隠れたりすることと、自分がいつものどかではないことを重ねた詠み方で、景色と身の上の「時の流れ」が表されている。それぞれ、移り変わりが穏やかでない世に生き、時間によって変化した心境や身の上、時間の推移によって変化する景色は、「時の流れ」によって生じることであり、兼好がその気持ちや景色を捉えて詠み込んでいると思われる。

〈四〉主に自分のことや相手のことを、心に強く思うことを詠んでいる歌。例えば、

ならびのをかに無常所まうけて、かたはらにさくら
をうゑさすとて

ちぎりおく花とならびのをかのへにあはれいくよの春を
すぐさむ (二〇)

月にむかひておもひつづけし (題は二四五番歌による)
おもひおくことぞこの世にのこりける見ざらむあとの秋
のよの月 (二四六)

などの歌がある。二〇番歌は、死後も一緒に過ごそうと花と

並んで墓所を造ったが、その後どれ程の春を過ごすのか、それまでの時間と心境が表され、二四六番歌は、自分の死後の秋の夜の月の美しさを見たいという執着心が、自分には残っているということを確認し、そのような自分をみつめた歌で、その「時の流れ」を哀れんでいる。自分に感じる哀傷や、ここではあげなかったが相手に感じる悲しみや喜び、「花」や「月」そのものに感じる哀感などを詠んでいるが、それは回想したり予想したりする、過去から現在、そして未来という「時の流れ」によって生じる今の心境を、「花」と「月」に託して詠み込んでいると思われる。

以上の分類のほかに、「花」と「月」には釈教歌も詠まれている。例えば、

法花経の序品

いづかたものこるくまなくてらすなり時まちえたる花の
ひかりに (二五)

兼任がすすめ侍りしあみだ経の歌

いつか又よのうきくものほかに見むこれよりにしにすめ
る月かげ (一九六)

などの歌がある。自然の「花」と「月」を詠んでいるのではなく、仏教思想に基づいた「花」と「月」を詠み込んでいる歌である。

以上、兼好の歌を叙景歌に続いて抒情歌を四分類して考察したが、それぞれに共通するものがあることがみられる。そ

れは、兼好の「花」と「月」の歌は、季節感を表したり、自然の美として表現するだけでなく、「花」や「月」をみて、心の内に生じる情趣や哀愁、人や物に対して馳せる思いを詠むものでもあることがわかる。そして、兼好の歌の特徴として、兼好が捉える「時の流れ」が、「花」や「月」の変化に伴う、「気持ち」の変化というかたちで、歌に詠み込まれているとみられる。

これを数量的にみると、「花」は、叙景歌として、2・3・58・61・164・165・167・189・200・209・254・272、抒情歌として、〈一〉38・39・40・44・107・113・114・135・161・162・163・253・255・257・274・275、〈二〉19、〈三〉55・210、〈四〉20・129・199・264・272・284、釈教歌として、25・26があり、「月」は、叙景歌として、9・74・75・97・133・136・179・215・217・237・238・277、抒情歌として、〈一〉7・12・63・94・140・171・186・224、〈二〉19・33・75・198、〈三〉245、〈四〉29・30（他人詠）・147・229・246・267・277（連句）・283、釈教歌として、196がある。以上、『兼好法師集』（釈教歌、他人詠、連句を除く）は、叙景歌「花」三三%、「月」四〇%、抒情歌「花」六七%、「月」五九%詠まれており、これまでの

考察から、抒情歌には高い割合で、心に生じた思いを「花」と「月」に託して詠み込んでいるという特徴がみられる。

三

これまでみてきたように、兼好の和歌には「花」や「月」を詠んだものが数多くあるが、兼好の随筆『徒然草』にも、「花」や「月」が描かれている章段が多くみられる。ここでは、そのいくつかの章段をてがかりとして、「花」や「月」に対する兼好のものの見方をみていきたい。

『徒然草』のなかで、「花」と「月」をとりあげて、兼好が自然の見方を述べているものは第百三十七段の前半がある。この章段では、「花」と「月」を中心に、その情趣はどこにあるか、その美しさをどのように見るか、といったことについて述べている。「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」として、「花」はその満開の美とは別に、未開の美や散った後の美を認め、「月」はその満月の美とは別に、見えない月を想像するという格別な情趣が述べられている。自然美の代表として「花」や「月」をみる場合に、満開や満月という完成されたものにだけみようとするのはなく、その過程をみることに重要性があり、またその嗜み方は客観的にみることが大切だと述べている。永積安明氏は「兼好の本意は、すでに発見されてもいた『散り過ぎ』た花や『散りしをれたる庭』の美しさを、ここで意識的・自覚的に再評価し、

これらを、『さかり』の花や『くまなき』月の美に対置しながら、より次元の高い美として主張しているのである」と述べて、兼好の持つ美意識の構造と本質を指摘されている。確かに、兼好のよしとする自然の趣や自然の見方というものは、自然の本質を見極めることであり、ここに兼好の美意識の特徴があるのではないかと思われる。

次に、第二十一段の前半では、何ごとにつけても、月を眺めることによって感興は深くなるものであることを述べ、第百六十一段では、桜の盛りの時期に注目し、第二百三十九段では月を賞でるのに良い夜の時期に言及するなど、自然の趣の深さを述べている。また、第二百十二段では、秋の月がこの上なく良いものであるとして、他の季節と区別できないような人は情けないと述べるなど、限らない執着を示している。『兼好法師集』にも自然美としての秋の月を詠んだ歌が五首(97・171・215・245・246)ある。これらには、美しい季節を知っていることこそ、その自然の本質を見ることができるとして、自然の美しさは、季節の変化を把握することによって、自然美を認識できるといったことが詠まれている。この自然の美しい時期を知り、その趣の深さを理解するということは、また季節の変化を捉えること、つまり、そうした変化を起こす「時の流れ」を捉えることと共通するものであろう。

また、第十九段「折節の移りかはるこそ、ものごとに哀な

れ」は、春夏秋冬を表すものとして、自然と人事とについて、季節の移り変わるさまの情趣深いことを述べている。兼好の自然に対する見方は、この章段の冒頭部分に集約されているように思う。ここでは、季節の推移に伴う自然描写をしているが、その景色を見ることによって生じた人間の心理や心情も把握し、その趣の深さをあらわしている。上田三四二氏は「まったく伝統志向的な情趣論の開陳と見える第十九段においても、兼好の関心の所在が、『折節の移り変ることこそ、ものごとにあはれなれ』—この、季節の変化の上にあることは重要だ。『変化の理』は彼の美学の根底にも横たわっている」と述べられている。確かに、兼好は自然の情趣について描くにしても、季節の移り変わりを多く述べているように、兼好の関心の所在は季節の変化の上にある。『兼好法師集』でも「花」、「月」をはじめ自然を詠む際に、景色の変化を詠んだものが多くみられたが、兼好の捉えた「時の流れ」と『徒然草』にみられる「折節の移り変ること」は共通するものであろう。

以上、兼好のよしとする自然の趣や自然の見方というものは、季節の推移に象徴される時の流れを把握するというところにあり、それこそが、兼好の美意識の特徴であることがわかる。さきにもあげたが、兼好は美を四季の動きという、つまり自然の推移という「時の流れ」による景色の変化として捉えてみている。そして「花」や「月」などの、自然の景色

が次第に変化していく様子が表されたものや、その景色を見て昔を思ったり、心の内に生じる情趣や哀感、人や物に対して思いを馳せるということから、兼好が捉えたのは「時の流れ」に人生における自己の変化を認識することであった。『徒然草』にもみられる「季節の変化」を捉えること、つまり「過程をみる」と一致するのである。これらから、兼好が自然をみるとき、季節の推移や展開を特に観察し、そこに「時の流れ」という本質を見、それが和歌にも反映されているとみられる。

四

ここで兼好の歌壇活動における「古今伝授」に注目しておきたい。兼好は一二三四年十一月、為世から二条家証本『古今和歌集』（以下『古今集』と記す）を借覧し、書写・校合し、十二月には『古今集』を受講している。さらに、一二三三六年に為定から『古今集』を受講している。この「古今伝授」は、兼好が『古今集』の影響を受けることになる、大きな出来事であった。『徒然草』第十四段は和歌について趣深いものとして、和歌の表現効果、価値などについて記し、また現代の歌に対して昔の歌の方が良いことが述べられているが、その中で、『古今集』の撰者の一人である紀貫之の歌にふれ、貫之の歌が『古今集』の歌屑と評されたことを擁護している。その紀貫之も「花」や「月」を和歌素材として多くの歌を詠

んだ歌人である。

さくらの花のちりけるをよみける

ことならばさかずやはあらぬさくら花見る我さへにしづ

心なし（古今集・八二）

この歌は、散ってしまうなら、いっそ咲かずにいてくれたらよいのに、と桜の散りゆくを見て、心に生じた思いを詠んでいる。また、兼好は『兼好法師集』の「哀傷歌事」で『忠岑集』を手本とすることを述べているが、この壬生忠岑も紀貫之と同様に『古今集』撰者の一人であり、「花」と「月」を詠んだ歌で注目すべき作がある。

題しらず

有あけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし
（古今集・六二五）

夜が明けても残っている有明の月が私にとってはずれなく見えた、あの別れをしたとき以来というものは、明け方ほど嫌なものではなくなったという気持ちであるよ、と詠んで、「有明」と「つれなくみえし」の語で、逢うことを許されない自分の悲しみを強調した歌である。「月」を見て昔の状況を思い出すということは、昔の有明の月と今の有明の月が時の流れを表しているので、兼好の「月」の歌にみられる時間の推移、つまり「時の流れ」を詠んだ歌と同趣の歌であるといえる。

兼好の家集にみられた、心の内に生じる哀感などを自然の

ものなど対象物に託して詠むことも、この『古今集』から受けた影響であり、兼好独自のものとしては、「時の流れ」に注目するという季節の変化や展開を捉えようとする美意識が和歌に反映されているといえる。久松潜一氏は、二条派の師である定家が理想としたのは『古今集』であり、兼好も、その理想を『古今集』においたということについて、貫之の歌を挙げて評価していることから、それが明らかであることを論じられている¹⁰。また、荒木尚氏は「兼好がとりわけ心を寄せていたのが『古今集』の和歌であったらしいことは、兼好歌の本歌の実相からも明らかであるが、(中略)兼好が『古今集』のような声調のよさ、余情としての『あはれ』を感じさせて新鮮な魅力をもつ歌らしい歌を庶幾していた¹¹」と、述べられている。

実際『兼好法師集』には『古今集』の影響とみられる和歌があり、本歌取りと認定できる和歌が一八首ある中で、『古今集』からは一三首取られていて、本歌取りの七二%を占めている。本歌取りの歌としては、「花」の歌は二首(3・257)、「月」の歌は三首(74・97・215)みられる。

「花」については例えば、

あふさかの関ふきこゆる風のうへにゆくへもしらずちる

さくらかな(三)

という歌が、『古今集』の「風のうへにありかさだめぬちりの身はゆくへもしらずなりぬべらなり」(九八九番、よみ人

しらず)を本歌として、逢坂の関に吹く風に散って終わる桜を、花びらが風にのって行方も知らず散ってゆくという幻想的な光景として詠んでいる。

「月」については例えば、

にほのうみのこほりのひまはなけれどもうちいづるなみ

や秋のよの月(九七)

が、『古今集』の「谷風にとくるこほりのひまごとのうちいづる浪や春のはつ花」(一二番歌、源まさずみ)を本歌にして、桜の景を秋の夜の月の景へと変化させ、鳩の海の湖に映った秋の月を、氷を割って現れ出た月かと捉えて詠んでいる。また、

木のまよりしたばのこらずやどるなり露もる山の秋のよ

の月(二二五)

は、『古今集』の「しらつゆも時雨もいたくもる山はしたばのこらず色づきにけり」(二六〇番歌、つらゆき)を本歌にして、守山では露ばかりか秋の夜の月も木の間から漏れると詠むことで、守山の秋の夜の月の幻想的な光を詠んでいる。

以上、兼好が『古今集』の影響を受けていることを、本歌取りの歌によってみた。兼好が二条派歌人として、為世、為定それぞれから『古今集』を受講していたということもふまえると、兼好が和歌を詠む上で、『古今集』を理想とし、それを兼好が「花」と「月」を詠むときにも、活用していたことが考えられる。

まとめ

『兼好法師集』には、「花」と「月」が詠まれた歌の割合が大きい。兼好の「花」と「月」の歌は、季節感を表したり、自然の美として表現するものだけでなく、「花」や「月」をみて、心の内に生じる情趣や哀愁、人や物に対して馳せる思いを詠むものでもあった。そして、兼好の歌の特徴として、兼好が捉える「時の流れ」は、「花」や「月」、人の「気持ち」の変化というかたちで、詠み込まれていることがみられる。その兼好が捉えた「時の流れ」は、『徒然草』にもみられる「季節の変化」と一致する。また、兼好が自然をみるときに、季節の推移や展開を特に重視していることがみられ、和歌だけではなく、『徒然草』にみられる自然描写の上でも重視されている。兼好の生涯を振り返ると、兼好にとって「花」と「月」は、自然の中でも季節の推移を表すものとしてよく把握でき、また、心の内に生じた思いを託すのには、もっとも身近な素材でもあった。自然のものに託して「人の心」を詠むことは、『古今集』から受けた影響であるとともに、「時の流れ」を意識して、季節の変化や展開を捉えるという美意識が、和歌に反映しているというところに、兼好独自のものがあるといえる。

さらに、それらの歌は『兼好法師集』全体に配置されていることに目を向けたい。杉浦清志氏は、『兼好法師集』は四

季配列を根幹としていること、具体↓抽象↓具体という連想の方法により構成されていること、この家集は生涯の記念碑的な意味を持っていたことを指摘されており、また、澤山修氏は、『兼好法師集』を全体的にみると、必ずしも心境変化の時間的順序通りに配列されていないことから、折々に記していた歌稿を手元に携えていて、一定基準に基づき編みながらもそれを徹底しなかったことを述べている。¹³⁾この二人の論にしたがっていえば、『兼好法師集』には、兼好の一生涯にわたって、初期のものから晩年に至るまで詠み続けてきた和歌作品を収載していると推測でき、兼好にとって「花」と「月」は、人生の「時の流れ」を表すものであり、そのときどきの心の内に生じる情趣や哀愁、人や物に対して馳せる思いを託すために、「花」と「月」を『兼好法師集』全体に配置したのであろうと考えられる。

注

- (1) 「兼好自撰家集の考察―改変過程と構成意識―」(『和歌文学研究』二九、昭和四八年六月)
- (2) 「兼好法師の歌材―四季歌を中心として―」(『語文と文学』一八、昭和六三年三月)
- (3) 稲田利徳、稲田浩子編『兼好法師全歌集総索引』(昭和五八年五月、和泉書院)
- (4) 和歌の引用は『新編国歌大観』による。なお、以下に引用する和歌も同書のものを用いる。

- (5) 『兼好法師集』は諸本があるが、本稿では『新編国歌大観』第四卷所収『兼好法師集』を用いる。
- (6) 「兼好の自然観」(『徒然草講座第一卷』昭和五八年九月、有精堂)
- (7) 日本古典文学大系『方丈記・徒然草』(昭和五〇年八月、岩波書店)
- (8) 『中世文学の成立』(昭和四三年六月、岩波書店)
- (9) 『徒然草を読む』(平成八年十月、講談社)
- (10) 「徒然草を構成する時代の思想——一条派歌人としての兼好——」(『国文学』、昭和三二年二月)
- (11) 「兼好の俳諧歌試論」(『就実語文』二〇、平成二二年二月)
- (12) 「兼好自撰家集」考——その構成をめぐって——(『言語と文芸』八四、五二年六月)
- (13) 『兼好法師家集』歌配列への一考察(『国語国文学研究』三二、平成八年二月)